
あの空のどこかで

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空のどこかで

【Nコード】

N0702L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

組織が壊滅して5ヶ月が経とうとしていた。薬も完成し、江戸川コナンが元に戻った後の自分の存在理由の有無を毎日のように考えていた矢先、哀はコナンの計らいでとある人物に会うことになる。コx哀x瑛祐 2009年度宮野の日作品Candlelight閉鎖に伴い移行小説

前編（前書き）

初めて書いた彼は、本当にあのヒトと同じ口調になってしまい、心残りです。

前編

組織が壊滅して5ヶ月が経とうとしていた。

研究に研究を重ね、ようやくA P T X 4 8 6 9の解毒剤の完成品が仕上がった。

それを告げると、彼はおいに喜び、『工藤新一』を復活できることに喜び、彼の素性を知っている周りに触れて回った。

問題は、『江戸川コナン』としての別れを、どうやって蘭さんや子どもたちに伝えるかが彼の最大の悩みだったわけだけれども、それも最近ようやく話をする事ができたようだ。ようやくほっとした彼の姿を見て、私も少しほっとする。これで自分の役目は終るのだ。・・・少しのアフターケアは必要にはなるけれど、半年もしたらそれらも必要となくなる。彼と私の接点もこれで終るわけだ。それが寂しいのか、それも一つのケジメ、戒めとなるから割り切っていることなのか、清々としてるのか。今はまだ実感がなくて。・・・というか、先が少しも見えなくて。

私はずっと悩んでいた。

この先、私がどうやって生きるのかも。

元に戻って、宮野志保として生きるのか。

元に戻らず、灰原哀として博士のもとで暮らすのか。

ここを去るべきなのか、残っていいのか。

わからず、ここ数ヶ月暮らしていた。空に向けて問いかけていた。あの空のどこかで姉や両親がいるとわかっていたから。

ねえ、私はどう生きればいいの？何をしなくちゃいけないの？
どうすれば私が殺したたくさんの人々に償いをする事ができる
かしら……？

それをあの人は、ずっと見ていたのかもしれない。知っていたの
かもしれない。だから……。

あの空のどこかで

「灰原、あのさー。昨日からオレの知り合いがアメリカからこっ
ちに来てるんだけどお前のこと話したらぜひ会いたいって言うてて・
・・。会ってやってくれねーかな？」

学校帰りの帰り道。子ども達と別れて、2人きりになってすぐ、
一本道を歩きながら、ランドセルを軽く揺らして、彼が言った。春
になれば『江戸川コナン』を卒業する人。

本当に何気ない表情で。彼はいつもそうやって子どもたちがいな
くなった後のこの時間に、いろんなことを提案したり、無理難題を
押し付けたりする。

親しくなつてからはここ最近ずっとそうだった。だから、随分この道を通る時は警戒していたのだけれども。今回はどういうわけか、そこに気持ちを置いていなかった。もしかしたら自分の知らないうちに一人感傷に浸っていたのかもしれない。そうして思いもよらない展開に一瞬眉を顰めて困惑を示した。

「・・・はあ？何それ。説明が足らなすぎて先が見えないんだけど。何で私が貴方の知り合いに会わなくちゃいけないの？そもそもその知り合いと貴方は一体どんな関係なのよ」

思わず眉根を顰めれば、彼は本当に忘れていたようで、「あーわりわり」と笑つてごまかした。

「覚えてるか？本堂瑛祐・・・あいつが来てるんだよ」

本堂瑛祐。

その言葉に聞き覚えがあつた。会つたことのないけれど、既に頭に刻み付けられている彼の名前。

「・・・覚えてるわよ。CIAの水無怜奈の弟でしょ。証人プログラムを断つて、CIAになるための勉強をするために渡米した」

私は小さく息を一つつくと、髪の毛をかきあげた。そうして、彼の言葉の続きを待つ。

「そう。・・・そいつが今一時帰国してるんだよ。ほら、水無さん、今自宅療養してるだろ。だからしばらく弟が身の回りの世話をしているんだけど・・・もうそろそろ彼女も回復してきたから、本堂もまたアメリカに戻るみたいで・・・それであいつ、久しぶりに会いにきてくれたんだ」

そうだ。私はまだ見ぬ彼のことを、耳で聞いて知っている。彼の周りにあった事実のことも。

水無怜奈はジンと戦って左太股と右手首を拳銃で打ち抜かれた。

そこで赤井さんやジョディさん達が助けに来てくれたので何とか逃げることができたけれど、組織の手下の姿を目先に発見され、体を庇いながら3階の窓から下に停まっていたトラックに向かって飛び降りたが、それでも着地を失敗し、そのまま意識を失った。幸い内臓には損傷がなかったけれど、それでも出血が酷く、5日間生死をさま迷った彼女。アメリカでその報告を聞いた彼はいてもたってもいられなかったのだろう。すぐに飛んできた。そして自分の知らないうちに組織と戦ったFBIやCIA、そして日本警察に強く抗議していた。

そう私は聞いていた。

”自分は除け者にされた。何のために僕はアメリカに行ったんですか。悪い組織と戦うために僕はCIAに入ろうと決意したのに・・・！何も知らされないで、酷いじゃないですか・・・！姉がこんな目にあってから知らされるなんて！！どうしてもっと早く教えてくれなかったんですか！？”

その潤んだ瞳には、悔しさが滲み出ていたという。彼の悲痛な叫び。この決断を下したFBIだけやCIAだけでなく、しばらくは工藤くんさえ目もあわず、口を閉じたままだったそう。彼女が意識を回復した後でも。

”FBIがこれからやろうとしていることを知っていて、それを俺があいつに何も知らせなかったことを許せなかったんだろ”

そう江戸川くんは辛そうな表情でいつか言っていた。

最初は、彼が加われれば強い戦力になると工藤くんは思っていたようだけれど、いくら水無怜奈の弟で、頭の切れる男だからとは言え、これ以上まだ組織を深くは知らない一般人を巻き込むわけにはいかない。

一人でも犠牲者を増やすわけにはいかない。そうFBIが判断したようで。

だからこそ敢えて何も彼に知らせなかったのに……。

いや、もしかしたら、本堂くんはFBIの心の腹をわかっていたのかもしれない。

だからこそ、悔しいのだろう。

自分が不甲斐ないから。何もできない自分が、一番許せなかったのだろう。

「よかったじゃない。少しは心の整理がついたのかしらね」

「そうみたいだな。……昨日会ったとき、ようやく顔つきが元のあいつらしく戻っていたよ」

穏やかに笑う工藤くんを見て、私もなんだか口元が緩んでいた。

が、ほだされかけて、あわてて話題を戻した。まだ自分がなぜ彼と会わなくてはいけないか、その答えを聞いてなかった。

「で？何でそれが突然私なの？学校にも行っていないんでしょう？私より会いたい友達がいっぱいいるんじゃないの？蘭さんとか園子さんとか。彼のクラスメートだったんじゃないかったの？」

「あー、いや。今回は会うつもりはないらしい。まだ怜奈さんの体も本調子じゃないし、また次回にするって」

「そう・・・なの」

「ああ。ま、あいつの気持ちはわからなくもねーけどな・・・」
「え？」

「きつともつと成長して・・・。立派になって会いたいんだよ、あいつ。蘭には特に、な・・・。そして、きつとあいつはおまえに今話さなくてはいけないと思ってんだろうから。蘭や園子たちに会うよりもつと大切な」

その最後に付け足した工藤くんの言葉の意味はわからなかったけど、じゃあ何故自分は今彼と会う必要があるのかの方が気になったから、その先は聞かなかった。

「会ってやって、くれるよな？」

道を歩いていた彼の足取りがぴたりと停まり、また工藤くんがそう尋ねた。

蒼い瞳が自分を捉える。

私は小さくこくりとうなずいた。

「・・・わかったわ」

彼がどんな男なのか。何故面識のない私と会いたがるのか、すごく知りたくなっていた。さっきよりずっと。

水無怜奈にそっくりな、影の背負った男の子なのかもしれない。

次の日曜日。私は紺色のワンピースを着て家を出た。約束場所に指定されたのは水無怜奈のマンションが見えるホテルの一室だった。8015室。そしてそのドアの向こうに彼がいる。深呼吸してブザーを押した。

「は、はあい」

思ったより高く間延びした声が返ってきた。本当に彼の声だろうか。一瞬疑ってしまうが、そのとき何かに躓いたのか、ドシン、ゴトン、ズーテン・・・と激しい音がして、一瞬沈黙が流れた。

「・・・え？」

「・・・」

「ちよっ・・・」

たつぷり15秒ほど置いて、ゆっくりカチャリと鍵が回る音の後で、ゆっくりとドアノブが回った。

そこに現れたのは、ひ弱そうなメガネの少年。おでこを少し赤くさせて。

「ども。・・・本堂瑛祐です・・・」

「ど、どうも」

衝撃的な出会いに思わず言葉を失って『灰原哀です』そう言うおうとした次の瞬間、彼　　本堂くんと呼べばよいだろうか　　その男の子は赤くなつたおでこを軽く撫でながらにつこり笑つてこう言つた。

「こんにちは、灰原哀ちゃん。・・・よく来たね。2回目・・・だったよね？君に会うのは。・・・こうやってちゃんと話をするのは今回初めてだけど」

「え、あ・・・ええ」

一瞬戸惑う。はじめましてだと思つたが、そういえば1度会つていたことを思い出した。まだ組織を追つていたころ。本屋で、1度だけ。蘭さんと園子さんも一緒に、みんなでカラオケに行くというから自分はパスしたわけだけでも。

しかしそのことよりも、この屈託のない笑顔に疑問を感じる。彼は何も知らないのだろうか。自分の本来の姿も。そう問い直しそうになつたとき、彼は言葉を続けていた。

「そして・・・お会いできて光栄です。宮野志保さん」

突然、口調が敬語に改められ、握手を求めるようにさつと手を出され、私は一瞬体を固まらせた。

やっぱりだ。やっぱり彼は気づいていた。いや、工藤くん知らされていたのだろうか。

上目遣いをして自分を見つめるその瞳は黒いビロードのように輝いていて。そして確実に自分を捕らえている。

けれど、うつすらと微笑んでいた。・・・何かを探ろうとしてくれるわけでもない、ということは瞬時に判断できたのだけでも。

だから、否定はしなかった。ただ、一言だけ。

「あなたは、何を、どこまで知ってるの？」

どうしてそんな穏やかな表情をしてるの？

こんな表情ををされてはしばらく続くこともできないし、そもそもするつもりもなく。小馬鹿にしているわけでもなく、媚びるようなわけでもなく、哀れんでいるわけでもない、この表情。ただ、穏やかに笑っている。

「・・・そうですね。新一さんを『コナンくん』にした薬を誰がいかにして作られたかという話から始まって、その人の素性と、そしてその人が今どんな風に生きているか、ってところくらいですかね。まさか『彼』と同じ小学生になっているとは思いませんでした
が」

自分で調べたのか。『彼』が話したのか。あの意味深な工藤さんの発言、表情。もしかしたら伝えなくてもこうなることは知っていたのかもしれない。

一体どんな風に知ったのか今知るべきではないのだろうか。

「あの」

「・・・ああ。ごめんなさい。別に貴方を驚かせたり警戒させるつもりはないんです。・・・僕は貴方の味方です。」

・・・多分。知る限りではきっと今は、誰よりも、貴方の気持ちを理解できる。多分貴方が今どう考えているかわかるから。・・・それを止めに来たのです。いや、貴方とただ、話がしたかった。ちゃんとこういう形で、ゆっくりと」

彼は、はぁ・・・と小さくため息をついて、それから口元だけ笑

つてみせた。そうして、「座って話しませんか？」と奥のソファを指差した。それに私は促されるまま、ソファに向けてゆっくりと歩き出したのだった。

中編

ホテルのテーブルは、アンティーク調の気品漂う木製のしつかりとしたテーブルだった。そして、それをはさんで向かい側のソファに腰掛けている彼が何か話すのを、今か今かと待ちわびていた。そうしながらも、ホテルのスタッフが用意してくれたミルクティーを一口飲み、緊張をどうにかして抑えようとしている。

「さて。・・・落ちついたところで、そろそろ話しましょうか。・
・僕がどうして貴方に会いたかったかそのわけを」

「そうね、そうしてもらうと助かるわ」

その言葉を受けて、ふつと彼、本堂くんが笑った。眼鏡の奥の瞳が一瞬だけ細くなる。

「僕ね、貴方のお姉さんを知ってるんです。貴方のことも、聞いてるんです。・・・だから、それを知らせた上で、君に僕の気持ちを話したかった」

「え」

耳を疑う。

今、なんて？

驚いて彼を凝視していた。コーヒークップを持つその手が小刻みに震え、中身がふるふると漣なみのように波立った。

まさか彼の、この本堂瑛祐という男からこの名前が出てくると思わなかったから。

いや、自分の名前を知っている時点でこの名前が出てくるのもわかっていなければならなかったのかもしれないけど。

けれども、相変わらず彼は穏やかに、いや、少し緊張しているような面持ちで話していたから、無心で聞きたい気持ちと、彼が発する一つ一つの言葉を拾ってその意味を探らなくてはならないという気持ちと半々だった。

もう組織は崩壊し、そもそも彼はCIAの父親と姉を家族に持つ男なのだ。工藤くんもたくさん彼を見てきたはずだ。

なのに、どうしても彼を疑わなくてはいけないと感じてしまうのは、長年組織からの圧力や、組織から追われ続けてきたことに対する恐怖、拒否反応に加え、彼が発した『姉』というキーワードに反応してしまったからなのだろうか。

物覚えついたときから両親を知らずに育ち、なおかつあまり触れ合うこともできなかったおねえちゃん。それでも、おねえちゃんはおねえちゃんだった。たまに会うときは組織のあの何とも言いがたい空気から解放できる存在を作ってくれたのがおねえちゃんだった。そのおねえちゃんのことを、自分の知らない一面を彼が知っているということ。

それがウソなのか真実なのか。自分の中の『おねえちゃん』を穢すのか、それとも……。それを今からこの男が発しようとしている。どうしても精神を研ぎ澄まさないといけないことだったのだ。

「……僕ね。2回、会ってるんです。彼女と。宮野明美さんと。……1度めは、11年前、病院で。そうしてその次はばったり道端で。彼女が亡くなる1週間前のことだったかな。……あの10億円強奪事件の」

「……!!」

「何を、どこから話そうかな……。言ってる僕もどう話していいかわからないんですけど……」

困ったように笑いながら、「それでも貴方に今伝えたくて・・・」
とゆっくりその思い出を言葉にし始めた。

「まずは・・・。11年前のことです。僕が初めて彼女に・・・。
明美さんに出会ったときのこと。僕はある病気をして入院していて、
・・・。それを治すための手術を数日先に控えて、緊張していたのを
覚えています。・・・。何だか落ち着かなくて、院内をブラブラして
たら、僕より4つ5つくらい上に見える女の子が・・・。小学生高
学年の女の子が、血まみれで虫の息の子猫を抱えて、涙ぐんで医者
に掛け合っているのを見たんです」

“この子を助けて！お願い、死にそうなの・・・！！”

「サラサラとした黒髪の綺麗な、目のくりつとしたかわいい女の
子が、水色のワンピースの胸元をぐつしよりと真っ赤に染めて、そ
の猫を抱きかかえて。ここは動物病院じゃないから。・・・。逆にそ
んな猫、ここに持つてきちゃいけない、動物病院探してあげるから
なんて宥められてて・・・。病院の前で撥ねられたみたいで・・・。
白い病院の床に赤い血が点々と垂れていくし、患者さんは早く
外に出せなんて叫ぶしで。すごく大変だったことを覚えています」

10年前というと、おねえちゃんは12歳。動物が病院で診ても
られないことぐらい重々承知だっただろう。それでも、助けてあげ
たかったのだろう。救わなくてはいけなかったのだろう。目の
前で消えていく命を何とかして食い止めたかったのだろう。

「結局その猫はあつという間に冷たくなつて。綺麗な艶の毛をやわらかそうなお腹を、まるでペンキに塗られたように真っ赤に染めて、・・・鉄の匂いをプンプンとさせて。死んでいくその猫を労わるように、時折、毛並みを撫でて・・・。そんな彼女の後姿を見て、僕は声もかけることもできずに・・・。結局彼女はすぐに追い出されてしまったんです。病院の職員に、僕たちの目の前で・・・。困った子だなんて罵られながら、周りの大人に白い目で、軽蔑するような目を浴びせられながら。・・・僕より随分背の大きな彼女が泣きじゃくりながらとぼとぼと冷たくなつた猫を抱えて歩いていく様子を、僕は玄関からずっと見ていました。彼女が病院の門を出て姿が見えなくなるその瞬間まで。

・・・それは、ほんの10分15分の間しかいなかったけど、彼女の顔は僕の脳裏にずっと焼きついてました。

・・・もう会うことはないと思ってました。・・・病気を治すための大きな手術を終えて・・・いろいろあつて僕は大阪にしばらく住むことになったから・・・。戻ってきててもあの街には戻らなかったし・・・。

けど、会えたんです。確かに僕は君のお姉さんに、あの日」

本堂くんはそうして言葉を止めた。そうして彼もまたミルクティで喉を潤す。

「東京のと真ん中。あんなに人が混みあつて、渋谷のスクランブル交差点で。僕は彼女を見つけたんだ。

向こう側で信号を待っている彼女の姿を・・・。子供のころしか知らないのに、しかも10分15分しか彼女の姿を見ていないのに。・・・何より、一言も話していないのに・・・。僕は、そこにいる彼女が、『あの時』の彼女だとわかつたんですよ」

瞑想するように視線を下に下げ、そうして彼もまた、自分の手元に置いてあるコーヒークップに口をつけた。

その動きを私はじっと目で追いかけた。早く話が聞きたくて、急かしたかった。そんな遠まわしに言わなくていいから、早く先が知りたくて。「どうして？」の『ど』と声が出掛かっていたとき、彼は再び話を再開した。

「彼女は僕に声をかけられたとき、何故だか一瞬怯えた表情をして、その後逆にすごい勢いで睨まれ、僕の腕を振り切って……。僕だけにしか聴こえないほどの小さな声でそう叫ばれたことを覚えている」

“ 約束は明日のはずよ！ ”

「やく、そく……。？」

「デートか何かの約束でもしてたのかと一瞬思いましたが、顔の知らない人とデートなんてするわけでもないし、何よりそんな怯えた顔なんてするわけがない。なのに、彼女は何故か僕の手をとって、今きた道を引き返していくんです。そうして、とある喫茶店に連れられて……。奥の席ですごい怖い顔をしてるから……。」

人違いだと思って、僕が慌てて弁解すると、びっくりした表情をして……。」

「そりゃ、そうでしょうね……。」

私はこんな大事な話なのに、思わず鼻で笑ってしまった。約束をしていた相手とは人違いだったということに気づいてしまったときの衝撃ほどびっくりすることはない。

けれど。私はピリリと表情を強張らせた。

「お姉ちゃ……。姉が会うはずだった相手って……。」

「組織の誰かかだったんでしょ。今になつたらそうも考えるんですけど、あのときは……。明美さんが亡くなったという新聞を見たときは、10億円の強奪事件の犯人と密会するつもりだったのかなとも思つて」

「……」

「……でもね、僕はやっぱり信じられなかったんです……。あのとき、僕が人違いだとわかつて……。ああ、誤解がとけるまですごく警戒されてたんですけど……。病院で猫のことを見ていたなんて話したらすごく驚いて、僕が一生懸命話していたら、そのうち少しずつ……。あのときの気持ちをたくさん話してくれたんです……。」

確かに、彼の様子を見ると、警戒してる気持ちが少しずつほぐれていくような気がする。今だってそうだ。

こんなに一語一句聞き逃さないようにしてるのに。

工藤くんも、彼を疑っていたとき、そういう感情面が大きく影響されたと言っていたから。

姉も……。お姉ちゃんも、そうだったのかもしれない。けれども……。それでも私は一つ彼の話でひっかかる点はあったのだけれども、深く訊くことはしなかった。それよりも訊きたいことはたくさんあったから。

「明美さんがしてくれたその話を聞いてると、僕はどうしても彼女が10億円強奪事件の主犯格だとは思えなかったんです……」

「そうよ……。だってあれは私を助けるためにしたことだったんだもの……」

「……でしょうね」

本堂くんは眼鏡の奥で優しく微笑んだ。その表情には憂いにも寂

しさにも見えた微笑みだった。

「わかりますよ。・・・明美さん、とっても妹さん思いの人でしたもの……。だから僕は自分の姉にも会いたいと思ったんだ。明美さんを見て。・・・小さいころ、自分をとつてもかわいがってくれていた姉も、まだ自分を思っていていてくれるだろうか、って。会いたかった純粋に思えたんです」

「・・・姉は何て？」

「・・・そうですね……。11年前に亡くなった猫ちゃんのことを教えてくれたんですけど。・・・その後、お世話になっているお家の庭の片隅に、いつでも声をかけてあげられるように、こっそりと埋めたのですが・・・」

その子はね、とっても大事な子だったんですって。妹さんと飼っていた猫……。もうしばらく会えない妹さんにいつでも元気な姿を見せてあげたかったんだ、と。だから何とかして助けてあげたかったんだ、と」

「！！」

そういえば・・・と思い出す。

確か、小学校へ留学しなくてはいけなくなる前は、留学後よりも僅かだけでも姉と頻繁に会うことができた。

そうして2人で組織の監視下のもと、遊ぶことが許されていたとき。・・・道端の段ボール箱に捨てられていた猫を拾って、飼おうと約束していた気がする。・・・数回遊んだりすることができたけれども、あつという間に組織からアメリカへの留学を強いられ、気がつけば日本を発っていた。そうして日本に帰れず9年の月日が続いていた。あのころは組織の教育と、学校の勉強とで、ずっと缶詰状態だった毎日。精神状態は追い詰められ、学校では孤独を感じ、姉を支えに私は生きていたような気がする。小さいころに数回遊んだはずの猫の存在すら忘れていた。

「『あのとき遊んだ猫のことはあの子覚えていないみたいけど・
・でも、仕方ないってわかってるんだ』」

「え？」

「あの人の言葉です。僕にそうやって告げてくれた言葉。寂しそ
うというよりか、また違う意味に聴こえた」

“あのとき遊んだ猫のことはあの子覚えていないみたいけど・
・でも、仕方ないってわかってるんだ。

だってあの子私よりずっと大変な思いをしてるもの・・・。あ
の子が一人でアメリカに行かなくてはいけない時も、私はこうして
日本に残って、おじさんとおばさんに育ててもらっていたわけだし・
・・。メルも・・・。あの猫とも一緒にいられた。・・・。ただどあ
の子はこの9年間・・・ううん、生まれてからずっとほとんど1人
だったもの。・・・だからね、早くあの子を幸せにしてあげたいの”

“幸せって・・・？”

“『幸せ』よ。．．．大丈夫、きつともうすぐ掴めるわ。．．．

あ、そうそう。今のことぜーんぶ内緒にしてね！

誰かに言ったら、貴方、殺されるわよ？”

“えっ．．．”

“でも、そうね．．．。いつか．．．いつかもし、あなたが私の妹に会えたら、気が向いたら伝えてほしいな。

”

『って”

“．．．はい。．．．はい、いいですよ？”

“ありがと。あの子としばらく会えなくなるところだったから。．
．．ほっとしたわ”

「・・・『守ってあげられなくて、ごめんなさい』
「え？」

「彼女が僕に託した、貴方に向けての言葉です。・・・それはど
ういう意味ですかね？」

「・・・愚問だわ」

私は答えた。

ポロポロと涙が目頭から零れていく。

『2人で育てていこうと決めた猫を』守ってあげられなくてごめ
んなさい。

『もう、貴方を』守ってあげられなくてごめんなさい。

「『でも、生きられるわよね？』」

「・・・生きられるわ、私は」

どうしてこう間を置いて彼は訊くのだろう。次から次へと涙が零
れて、言葉にならなかった。

後編

しばらくして、本堂くんはまだ半分も減っていないミルクティーをわざわざ熱いものに変えてくれた。

・・・きつと私はそれにまだ手をつけることもできないのだろうけども。

「知ってましたっけ。僕の姉、CIAの諜報員なんですよ。それで以前、しばらく組織に忍び込んでいたんです」

「・・・知ってるけど・・・。そんなあっけらかんとばらしていなの？秘密組織なんですよ。そんな国家機密、知ってるか知らないかわからない人なんか気軽に口

に出したらあなたお姉さんに絶交切られるわよ」

「志保さんだから話すんです！！あ、でも内緒にしてくださいね！」

しいー！！しいーっ！と人差し指を作って口の前に当てて必死になっている彼を見て、私は思わず失笑した。するつもりはさらさらないけど。

「僕の父も諜報員だったのですけど・・・。自分と接触しているときに組織から発信機が姉に付けられていたのを発見し、この場所に来るのも時間の問題だったことを知って、・・・姉を守る

ために自らを犠牲にしたんです。そうしてそのおかげで姉は組織から信頼を得ることができた。

・・・明美さんも、自らを犠牲にして貴方を助けたんでしょ？」

「ええ。結局はおねえちゃんが死ぬだけで終っちゃったけどね。・
でもそれをきっかけに

私は組織から抜けようと思ったし……。それに、工藤くんや
貴方たちと出会うきっかけになった」

「僕ね、コナ……。新一さんから話を聞いたんですよ。彼の仲間
に実は組織に深く携わった人がいて、今は一緒に組織と戦ってきた
人がいる、って。そしてその人は僕と似たような境遇にあっている人
なんだって。……。だから、……。あ、これ、言っちゃいけ
なかったことでしたかね？」

「いいわよ、別に」

再び慌てる本堂くんに対して、私は思わずクスリと笑った。黒幕
はもう一人いたのだ。

最初からすでにわかっていたことだけでも。

「でも、それを知ったらやっぱりこのことは話したいと思ったん
です」

「……。私も、それを聞いてよかったと思ってるわ。……。・
ずっと、思っていたの。姉と会う約束を破ってしまって、……。
本当なら亡くなる2週間前には会えるはずだったのに。全然話せな
かった。

自分の命を犠牲にしてがんばろうとしてたのに、最悪よね……。・

「

「……。そうですね。……。そう思ってるのだったら、一生懸命
今を生きることですよ。……。それがお姉さんへの償いですよ。人
のためにじゃなくて、自分のために」

「え」

「ずっと、悩んでたんでしょ。元に戻るか、戻らないか」

「それも、あの人から？」

「はい」

につこり笑って、本堂くんは笑った。私もその笑顔に思わず笑顔が零れた。

「あなたが宮野志保さんでも、灰原哀さんになっても、きっと明美さんは見守ってくれてますよ。」

勿論、お父さんもお母さんも。『志保は志保なんだから』ってずっと応援してくれてると思いますよ。だから・・・」

「わかったわ。・・・ありがとう」

私はそこでようやく再びコーヒークップに口を付けた。少し熱めのミルクティーが喉を通る。少しチリリと痛い。そうして皿の上のクッキーを一つ手を伸ばした。それに対してほっとした表情を彼はしたよううで。

「何？」

「いや、初めてクッキー食べてくれたから。よかったな、と思って。きつとお父さんもお母さんも、

明美さんも手を叩いて喜んでると思いますよ」

「手を叩いてって・・・そんな大げさな」

「いや、おめでとう！って絶対言ってるはずですよ！そして、きつと僕のお父さんも、お母さんも。こうして志保さんと出会ったこと、話していることもきつと喜んでるとおも・・・ぎゃ！あちちち！」

興奮して立ち上がった瞬間、コーヒークップが倒れ、中からたくさんミルクティーが零れ、テーブルに染みを作った。そうして彼の足にも零れ落ちる。相変わらずのこの男に、思わず私は呟いた。

「やっぱり、信じられないわね、今の話。・・・少し、・・・てい

うか大分作ってない？」

「え、何で？！僕ウソ一つも言っていないですけど！！」

「だって……。いくらなんでも、おねえちゃん貴方を組織や10億円強奪事件の犯人だなんて勘違いするはずないもの……」

「し、失礼な……。！でも間違いなく人違いしてたんですう！！！」

「じゃあウソは言いすぎかもしれないけど、そこは夢とか、むしろ記憶の履き違いとかじゃないかしら？」

「ばっ……。そんなはずありませんてば！」

必死に否定する本堂くんに冷ややかな態度をしつつも、私はふとホテルの窓から見える空を見上げた。

高い高い空。そして真つ青な青。私の大好きな色だ。

果たして、その疑惑は自分が天寿を全うするまでのお預けとなってしまうわけだ。

それでも私は彼の言葉が全て本当であればいいと思った。そうして、あの空のどこかでこんなやりとりを笑って見ていてほしいと心から願った。

後編（後書き）

2009年宮野の日投稿作品です。

今年も作品書くぞ！と意気込んでいましたが、もとのスランブと、宮野家の話の情報が少なすぎて、ネタもつきて……。今回はひじょーに行き詰っていました。

けれど、どうしても作品投稿したい！ということ。ようやくない頭をフル以上に使って、出した人物が、本堂瑛祐くん。彼は私にとって、とっても残念な結果に終わってしまったのです。

何故、哀ちゃんと接触させなかったの！？あのときはすごく不完全燃焼をしました。や、哀ちゃんが帰るところで「えええっ！？ここで帰っちゃうの！？」みたいな（笑）すごく悔しい思いを。

そして、そのままあの人は日本を発ってしまいました……。正体ばらして、蘭ちゃんの気持ちも伝えて、お互いすっきりだと思うけど、こっちはモヤモヤしちゃったサ！（笑）このまま最終回付近まで彼を見れなくなるのかなって思うと……。なぜだ！？みたいな（笑）彼のドジキャラは結構哀ちゃんと合うと思ったし。

それにね。真面目な話。

彼と哀ちゃんでは似た要素を持っていたと思います。彼も、哀ちゃんも共に両親を亡くしてる。そうして、2人には年の離れた姉がいて、姉はまた、妹を、そして弟を愛していたながらも、この十数年間、あまり一緒にいられずに過ごしてきた。そして、瑛祐の姉 水無怜奈はCIAの諜報員に、哀ちゃんの姉 明美は黒の組織に、とお互い立場は違うけど、そんないろいろ謎あるところに属してて。

本当は、明美さんと水無さんも接触させたかったんだけど、その話を混ぜ込むとさらに大変な話になって……。今の私にはきつと収拾しきれなかったのだ。

今回はここまでで。とにかく、お互い似た要素を持っている二人に接触させて、哀ちゃんの不安やいろいろなものを吹き飛ばしてあげさせたかったんですね。

で、猫の話は……。ハハ、無理やりです（笑）。瑛祐さんと哀ちゃんを接触させる中で、明美さんの話をさせるのではやっぱり普通に彼が明美さんを知らなければ説得力が欠けるかな、と。そうして、二人を合わせたんです。小さいころ、病院で、っていう設定でそういうエピソードと、そうして大人になった彼女との会話も入れたくて。欲張りすぎたかな、と思いつつ、でもやっぱり小さいときの話より、大人になってからの話の方がうまくコトバが出てくるような気がして。けど、小さいときの話がなければこんななんてーか、腹を割った……。というか秘密な話を見ず知らずの少年に伝えないだろうな、とか。

あのときの、いうなればあまり人には話したくない状況の自分を見られて、そうしてそんな自分を覚えていて、声までかけられたということに、何か運命的なものを感じてしまったからこそ、こんな話をしたのかな、と。だからこの2つの接触が必要だったわけです。

毎回毎回、明美さんと志保さん（哀ちゃん）を絡めると、どうしても最後は『生きて』

『精一杯の人生を全うしてほしい』『心から笑ってほしい』そんな話になってしまうのですが（笑）。そうして今回もそんな話になってしまったかなあ……。でも、こういう話が好きなのよ……。！すみません……。><

今回の話、初めて瑛祐くんを書きましたが、本当に楽しかったで

す。ドジキャラ、無理やりつくってみました。どうしても語り口調だけだと、表現力とかが乏しいので、みったんに見れてしまうのです。だから無理やりね。でも、群馬県警の山村刑事にもどうしてもイメージしちゃうんだよね。・・・あの人もドジキャラですよね（笑）

最後までお読みいただいて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702l/>

あの空のどこかで

2010年10月10日00時29分発行